教育支援（幸せの子どもの家）

プロジェクトの背景

ポルポト時代に家族を失った経験を持つソカ氏の孤児院設立の構想に対して、2002年に当会が施設を建設し、創設に携わった。贈呈式は2002年11月30日。主にゴミ山で生活している孤児等を調査面接し、就学意欲のある16名の支援から開始した。CCHはCenter for Cildren's Happinessの略称。日本語では「幸せの子どもの家」と呼ぶ。カンボジアのNGOとして正式に登録されている団体で、設立当初からソカ氏が所長を勤める。これまでに在籍した子どもの数は203名。2013年3月末現在、92名（男46名、女46名）の子どもが生活している。また、CCH内で運営されている小学校にはCCH内の子ども40名の他に外部の子ども70名を受け入れている。

インタビュー

『CCHは若いリーダーのもとで永遠に存続して欲しいと思います。』

CCH所長（理事） Mech Sokha

メチ・ソカ所長

自立に向けて取り組む子どもたち

CCHの役割とは？

まず始めにJHPの支援者の皆様へ、CCHへの支援に寄せられるご親切や寛大なお心に対して、心からの御礼を申し上げます。

CCHは困難な環境におかれている子どもたちが、学問的にも社会的にも良い教育を受けられるように、また、健康管理面でも日常の生活面でも適切な支援を受けられるような孤児院の機能を果たす組織です。

日本の支援者の皆様は、カンボジア社会において子どもたちが自立し、相互に助け合える、よりよい未来に向けての夢を実現するために、他に先駆けて支援をしてくださいました。

CCHの全スタッフと私は、子どもたちが18歳になった時に社会的にも法的にも自分の行動に責任が持て、的確な判断ができるような良き市民に成長できるように、子どもたちが変わっていく手助けをしています。

これまでの実績について

CCHは、日本の支援者の方々の援助のもとで203人の子どもたちを支援してきました（右表参照）。203人に教育を施すことの具体的な意味は、子どもたちに知識や技術を与え、よき心構えを身に着けさせることです。その結果、中にはすでに職業を持ち、大きな組織で法的にも社会的にも責任ある立場で行動し、的確な判断ができるようになった者もおります。

項　目	総数	男子	女子
小学生	40	18	22
中学生	52	28	24
小　計（CCH現在数）	92	46	46
CCHサポートのプノンペン市内大学生	7	3	4
自立している高校生、大学生	35	14	21
社会人（CCH卒業生）	63	46	17
海外のインターナショナルスクール在籍者	6	3	3
支援総数	203	112	91

小山内代表の存在とは？

私個人も、お母さんのような存在である小山内美江子代表の支援のもとで生活が変わりました。小山内代表は私がそれまでの生活を変え、高い教育を受けられるように支援してくださいました。それによって私は、他の困難な環境に置かれている子どもたちが生活を変えられるように支援できるようになったのです。

将来のCCHについて

私は年々歳を取っていきます。そこで私は2011年から、かつてCCHで生活をしていた9人の若者と共にCCHを運営していくチームを組織し、年間の運営プランを作っています。

私は、将来引退した時にCCHの活動が終わってしまうようなことを望みません。CCHは各世代に引き継がれ、若いリーダーのもとで永遠に存続してほしいと思います。そこで、私たちはCCH運営チームの基盤を強化できるように懸命に取り組んでいます。また、CCH運営チームは、自らのよき経験とCCH理事会やJHPスタッフのアドバイスのもとにCCHを一歩一歩着実によりよいものしていく方法を学び、かつ、努力をしています。

私は運営チームが子どもたちの支援活動でよい結果をもたらし、周囲に良好な影響を与えられるようにCCHを継続的に運営していくことを強く期待しています。それは、困難な環境に置かれている子どもたちが十分な知識と生活と仕事の両面で生きていくための術を活かして、よりよい未来に向かって現在の生活を変えられるように支援を継続することです。

最後に改めて、JHP支援者の皆さんに心からの御礼を申し上げるとともに幸福と健康と繁栄をお祈りいたします。

ボランティア派遣

プロジェクトの背景

JHP設立以前の1991年に、小山内代表が湾岸戦争後のイランのクルド難民救援に参加。ここで初めて大学生と活動を共にし、その成長する姿を見たことがきっかけとなり、地球的視野を持つ若者を育成する事業を開始。これまで、海外は、カンボジア、旧ユーゴ、アフリカ、インド、ボスニアなど、国内は、阪神淡路大震災、日本海重油災害、中越地震、三宅島帰島、東日本大震災などの救援活動にボランティアを派遣している。

ブランコ立ち上げ作業は最大の山場

カンボジアボランティア隊

今年度は、8月隊（2012年8月2～25日）15名、3月隊（2013年2月28日～3月23日）14名を派遣しました。8月隊は、タケオ州、プルサット州の小学校、3月隊は、スワイリエン州、プレアシアヌーク州にてそれぞれブランコ建設に汗を流し、他に、学校贈呈式参加、JHPプロジェクト見学、NGO見学等を行いました。

学校の子どもたちもお手伝い

力をあわせてコンクリート練り

贈呈式でソーラン節披露

アフリカへ毛布をおくる運動

JHPはアフリカへ毛布をおくる運動推進委員会の構成団体として活動しています。この活動では29年間に400万枚以上の毛布が20以上の国々に送られています。2012年度は、4月28日～5月6日までJHPから2名の学生をエチオピアに派遣しティグレ州での毛布配布とモニタリングに携わりました。同委員会に今年度寄せられた毛布29,349枚、海外輸送協力金約3,235万円は、2013年度以降の活動に役立てられます。

参加者の感想

今回の活動を通して、一番心に残っているのは、やはりカンボジアの人達の笑顔です。運転手さんを始め、学校の子供達、店員さん、町の人々と、カンボジアの人々は2秒ほど目を合わすとニッコリと笑ってくれます。いつの間にか毎日たくさんの笑顔を見ていました。そして私も自然と笑顔になりました。素敵な環境で過ごせたなと思います。（2013年3月隊 宮澤あかね）

「小学校にブランコを作る」。実際に行ってみると、それは想像以上に大変な作業でした。しかし、その目標に向かってみんなで力を合わせる。その中の一員として自分にできることを見つけて全力を尽くす。その経験は、日本では絶対にできないことです。「できることから」をモットーにこれからも精進します。（2013年3月隊 緒方浩平）